与える者か、与えられる者か？
——マリオンの「自我」に対するラディカルな解釈について

The Giver, or the Gifted?: On Marion's Radical Interpretation of the I

朱　　剛*
訳：河合　一樹**

序

デカルトによって始まった西洋近代の主体の哲学はフッサールの超越論的現象学によってその頂点に達した。この超越論的現象学においては、超越論的主体としてのエスあるいは自我は世界の構築者・意味を与える者と見なされ、その意味においてある種の根源となった。しかし、フッサールの後には、自我のこのような主体ないしは根源としての地位は様々な形で覆され消し去られることとなった。現象学運動の外の構造主義や精神分析はいうまでもなく、現象学の内部においてもハイデガーの「現存在（Dasein）」からレヴィナスの「無限によって基礎づけられた主体性」まで常に他者に「まとわりつかれて」きた自我が、マリオンいたってさらに「与えられた者（l'adonné, the gifted）」としての自我となったように、様々な自我の根源性の解消が絶え間なく起こって来た。本稿では、マリオンの自我を「与えられた者」として捉える近年のラディカルな構想について検討する。この構想においては、自我はもはや伝統的な意味における主体や根源ではない。現象の顕現の可能性の条件でもなければ、世界の構成者や意味を与える者でもなく、受け取った者を顕現させる舞台・プリズム・スクリーンに過ぎない。そこにおいては、自我は主格の自我から対格の自我や与格の自我へと反転し、与える者から受

＊中山大学哲学系、东西哲学与文明互鉴研究中心教授
＊＊広西大学外国語学院日語系、助理教授

け取る者や与えられた者へと反転する。そしてさらには、自我は与えられた事物を受け取る際にのみようやくそれ自身を受け取って発現することができるようなものになる。これがマリオンの自我についてのラディカルな解釈である。

マリオンの自我についてのこのようなラディカルな解釈はその現象学的還元についてのラディカルな解釈と密接に関係しており、前者は後者の必然の結果である。そのため、マリオンの自我についてのラディカルな解釈について深く理解したいと思うならば、まずはその現象学的還元について論じなければならない。

一、顕現から与えることへ—マリオンの現象学的還元についてのラディカルな解釈

マリオンは「全ての現象学は、陽に（フッサール）陰に（ハイデガー、レヴィナス、アンリ、デルダ）還元を譲ることのできない試金石として用いて来た」[1] という。確かに、現象学が再び形而上学や経験論に堕落しないことを保証するためには、還元によって事前に警戒することが必要である。そこにおいては、いかなる形而上学的仮説も排除されるとともに、純化を経ない素朴な経験が身の丈を超えた地位につくことも阻止される。還元によって唯一現象学における正当性が与えられるのは、純粋な顕現者（現象）のみである。しかし、広く知られているように、フッサールとハイデガーという二人の偉大な現象学者において、すでに還元は二つの異なった形態をとっており、「顕現」の純化と保証も異なった道を辿った。フッサールにおいては、現象学的還元は超越論的還元と呼ばれ、ハイデガーにおいては現象学的還元は実存論的還元となった。この二つの還元はともに純粋な現象へと立ち戻ろうとし、現象学的な事実そのものへと立ち戻ろうとしているが、その純粋な現象や事実そのものに対する理解は明らかに異なっている。そして、マリオン

によれば、フッサールの超越論的還元もハイデガーの実存論的還元もともに充分に徹底したものではなく、さらにラディカルな第三の還元が必要となる。すなわち、「呼び声の、かつ、呼び声への還元」[2] あるいは「顕現から与えられたものへの還元」（p.59）であり、最終的には与えられることへの還元である。以下では、まずマリオンのフッサールの超越論的還元に対する分析とハイデガーの実存論的還元に対する分析をそれぞれ確認した後に、マリオン自身の第三の還元について論じることで、マリオンの自我についてのラディカルな理解を扱うための準備を整えたい。

フッサールの超越論的還元は厳密には超越論的主体性にいたるための方法である。[3] なぜ「超越論的主体性」にいたらなければならないのだろうか。

エポケー（超越論的還元の第一歩）の後には、超越論的主体性としての純粋意識のみが超越論的現象学の唯一の正当な領域として残る。もちろん、ここでいう純粋意識はもはや伝統的な哲学におけるような、まず主体の内部に閉じ込められており、後に対象との間に関係を持つような意識ではなく、志向性の構造においてノエマを持つような意識である。このようなある種の純粋意識としての超越的主体性こそが、世界の構造の起源である。[4] 注意しておかなければならないのは、この還元の動機は対象世界の構造の起源を明らかにすることにあるという点である。そのため、マリオンは「それは対象の構成に相当し」、「対象性へと送り返されないものすべてを贈与から排除する」[5] という。そして、対象は超越論的還元の後には、超越論的主体性や純粋意識の構造によってつくられるものであるとみなされる。そのため、マリオンからすればこの還元には二つの決定的な問題が残ることになる。第一には、「自我」をある構造的な自我意識における主体として捉えることである。第二には、「対象」を「ノエマ」に還元し、意識活動によってつくられるものであるとすることであり、そこでは「対象」はもはや「それ自身」として顕現する「現象」ではなくなる。この二つの点が、マリオンが第三の現象学的還元を主張することになった理由である。

次にハイデガーの実存論的還元について見て行こう。「実存論的還元」という言い方は、マリオンがハイデガーの還元の方法について付けた名前である。マリオンは『還元と贈与』において「第二の還元は、それが実存する存在者によって行われるという点で実存論的であり、またそれが存在の問いを開くという点で存在論的である」[6] といっている。ここでの「実存する存在者」は明らかに「現存在」のことである。そのため、この還元は現存在によって行われる。存在者はその存在性へと還元され、存在の問題が切り開かれる。マリオンはハイデガーの「実存論的還元」がフッサールの「超越論的還元」から一歩進んだものであるとする。「いまや還元は、世界の（存在者の）定立から現象の安定した現前における内在へと導くのではなく、存在者の被暴露性としての現象から存在者をその存在に向けて深く了解することへと導く。」そのため、ハイデガーの立場では「現象学的考察は、存在者の存在自身を規定することのみに専念する」ことになる。しかし、マリオンからすれば、このような還元にも欠点がある。「存在する必要のないものを、とりわけ「存在現象」の諸前提条件を排除する」[7] すなわち、マリオンはハイデガーの実存論的還元は存在現象に回帰し顕現に回帰したもののまだ十分ではないとしている。というのも、存在以外にまだ存在しない者や存在しなくてもよい者があるからであり、顕現以外に与えられてはいるがまだ顕現していないものもあるからである。

上述の問題は、その実この二つの還元の共通の限界でもある。というのも、それらはともに「顕現」への還元であるからである。超越論的主体の志向的意識へと還元するフッサールの超越論的還元も、現存在の実存活動に還元するハイデガーの実存論的還元も、ともに事物の顕現と関わるものであり、それらの還元はともに事物の顕現へと向かう還元である。しかし、超越論的主体の志向的意識によって顕現するのであれ、現存在の実存活動によって顕現するのであれ、事物は「それ自体」によって顕現するのではない。前者について、マリオンは次のように問う。「その実、もし超越論的な我がある現象

をある対象として構成しており、この対象はその思想を完全に支配するためにその思想によって支配下に置かれているとすれば、その現象はどのようにしてそれ自身によって自らを展開することができるだろうか。」（p.37）そのため、フッサールにおいては、現象はそれ自身で自らを展開し自らを顕すことはできない。また、超越論的還元は実のところフッサールが考えたように事物「そのもの」に到達することはできない。

ハイデガーの実存論的還元についても同じことがいえる。ハイデガーは現象をそれ自身によって自らを顕すものと規定しているが[8)]、マリオンのいうように次のような問題が残っている。ハイデガーは「自らを顕示する作用において、それ自身として考えられるものについて多くの部分を曖昧なままにしている。」（p.37）ハイデガーにおいては、事物の顕現は実のところ現存在の実存を通してしか行われず、現存在の非隠蔽化の活動においてしか実現されない。現存在の存在がなければ、事物は非隠蔽化されることなく、顕現することもない。この点からすれば、ハイデガーの実存論的還元もまた、事物「そのもの」に到達することはない。

この二つの還元の成果は、それらが異なった仕方で事物や顕現にまで遡ったことである。しかし、この二つの還元の欠点として、それらが未だ事物「そのもの」には達していないということがある。そして、この欠点があるために、結局のところフッサールもハイデガーも顕現と自らを与えることとの間の距離に気づかず、両者を同一視してしまった。確かに事物の顕現と超越論的主体の意識活動や現存在の実存活動との間に距離はないが、事物が自らを与えることについては、事情は必ずしも同じではない。顕現と自らを与えることは同じではなく、両者の間には取り除くことのできない距離がある。そして、自らを与えることは顕現の可能性の前提でさえある。

顕現と自らを与えることとの差異および両者の関係を指摘したのはマリオンに他ならない。彼はその現象学三部作の第二作『与えられることで―贈与の現象学論考』において、この問題を当該著作の「唯一の主題」であると

さえいっている。「自らを顕示するものは、まず自らを与えるものでなければならない―これこそが我々の唯一の主題である。」[9] 現象学三部作の第三作『溢出について―飽和した現象についての研究』でも、マリオンは「自らを与えるもの（*se* donne）からすれば、現象は自らを顕示することである―この点に達するためには、どのような自らを顕示するものも、さきに自らを与えなければならない。」（pp.37-38）したがって、現象が現象になろうとするならば、あるいは自らを顕示し表現しようとするならば、まず自らを与えなければならない。自らを与えることは自らを顕示（表現）するための前提なのである。「もし表現が与えられることによって産み出されるものだとすれば、与えられることは必ず表現に先立っていなければならない。そのため、与えられることは表現より先にある。」（p.38）しかし、その逆が成り立つ訳ではない。「全ての自らを与えるものが、必ずしも自らを顕示する訳ではない―与えることあるいは贈与（la donation）の全てが現象化する訳ではない。」（p.38）また同時に、マリオンは次のようにもいう。我々が見ることができるのはただ現象化された者・自らを顕示する者・顕示された者のみであって、「自らを与えるもの（la donation de soi）を直接的に見ることはできない。」（p.38）―そうであるならば、我々は「どのようにして自らを与えるものについて知ることができるのだろうか。」（p.38）

どのようにして知ることができるか。さらなる還元、すなわち従来の顕現への還元をさらにラディカルに与えられたもの・贈与性への還元へと進めることによってである。これこそがマリオンのいう第三の還元である。彼はこの第三の還元が疑う余地なくこれまでの二つの還元を超えたものであるとする。なぜなら、それはより徹底的でラディカルであるからである。「我々が実現しようとしている顕現から与えられたものへの還元は、それが乗り越えるべき二つの主要な還元の在り方と危険なまでに異なっている。……なぜなら、それはもはや現象を現象の被構造的な対象とする（フッサール）のでもなければ、現象の存在における存在性とする（ハイデガー）のでもなく、

究極的に現象を与えられたものとする。そこにおいては、自らを与える程度に応じて自らを顕示する―そのため、それは究極的で他のどのような還元によっても還元できないようなものが与えられたものである。」（p.57）[10] このような還元は先立つ二つの還元とは明らかに根本的に異なっている。先立つ二つの還元は現象の顕現へと還元するものであり、この顕現は主観的意識や現存在の存在によって得られるものに過ぎないため、実のところ現象そのものまでその還元が至ることはない。それに対して、マリオンの還元はそれ自らによって自らを与えるものの現象そのものまで至ることになる。テンゲィ（Tengelyi）によれば、この点はマリオンに代表されるフランス新現象学と古典的な現象学を区別する際立った特徴である。テンゲィは次のようにいっている。「そこにおいて、「それ自らについて」という表現が強調されているのは偶然ではない。顕現が自発的に与えられることに注意を向けることは、フランス新現象学の際立った特徴である。……マリオンは現象一般は自らそのものによって与えられるものであることを証明するために力を尽くしている。そのため、現象はただ単に自らを顕示するだけのものではなく、自らを与えるものでもある。……結局のところ現象そのものは常に、どのような主体的な仕方によって与えられるものにも還元できないようなものである。自発的な仕方で湧き出てくるものを描いたことが、……フランス新現象学の最も大きな成果である。」[11] テンゲィのこの指摘は非常に重要である。レヴィナスも他者の顔を卓越した現象であり、主観によって与えられるのではなく自らを与えるものであるとしたが、マリオンはそのような自らを与えるものを現象一般にまで拡げた。

さらに、与えられたものへの還元はまだ還元の終着点ではない。というのも、与えられたものは与えられたのであり、「与えられること」や「（被）贈与（性）（la donation）」こそが最終的な現象学的事実であり、現象学―あるいは哲学そのもの―の最も重要なもの、第一のもの、端緒である。「この（与える）行為に基づいて、自らを顕示するものは自らをあたえる。そして、自

らを与えるものは顕現の還元不可能で最も重要な自身（le *soi*）から出発して自らを顕示する。」（p.31）そのため、この還元は与えるものへの還元からさらに「（被）贈与（性）」への還元へと先鋭化されなければならない。「（被）贈与（性）の現象学」こそが、マリオン現象学の最終形態となる。また同時に、このような（被）贈与（性）は哲学の真の最も重要なものあるいは最終者であるとみなされるため、このような（被）贈与（性）の現象学は第一哲学ともなる。[12)]

以上のようなラディカルな現象学的還元を経ると、与えられたものはもはや私の意識という主観が与えるという仕方で与えられたり構成されたりするものではなく、自らを顕示する者がそれ自らによって自らを与え、それ自らによって我へとやってくるようなものになる。そのため、このラディカルな還元においては「私」の地位の根本的な転換が生じることになる。すなわち「私」はもはや対象を構成し、意味を与える者ではなく、自らを与える者を受け取る者となる。

二、与える者から受け取る者へ（l'attributaire）ー自我の被贈与的な還元における転換

デカルト以来、自我は主体として規定され、哲学において最も重要で最初に考究すべきものとして確立された。シェーン・マッキンレー（Shane Mackinlay）は、主体としての自我が現象の可能性の限界となったと指摘している。[13)] それ以降、あらゆる他の存在者はすべてコギトとの関係の中に置かれることになり、コギトの対象へと還元された。そして、それらの存在は自我が先立って存在しているということに依拠することになるため、自我は他の全ての存在者の基礎や根拠となり、卓越した存在者となった。[14)]「全ての存在者は対象（*objectum*）であり、思考されるもの（*cogitatum*）であるにすぎないために、自我は先立って存在し、他の全ての存在者よりも確実なもの

である。それに対して、全ての他の存在者は思考される対象にすぎないために、自我は卓越的で優先されるべき存在である。」[15] そのため、デカルトの形而上学においては、存在者は自我の思考の対象へと還元され、自我は対象の存在の基礎となる。自我は形而上学的な基礎としての役割を与えられる。[16] デカルトが自我にこのような主体性を付与し、カントを経てフッサールに至ってより徹底された。現象的還元によって、コギトは単に第一に保障される疑うことのできない哲学的な省察の起点であるだけでなく、すべての対象を構成する起源として提示され、あらゆる意味を付与し与える者となり、二重の意味で最初のものとなった。[17]

フッサールの現象学は事実そのものに帰ることをその使命としているものの、この使命は超越論的主体性を究極的な源泉としているために初めから達成される見込みはない。そこにおいては超越論的主体性が究極的な事実そのものと見なされ、また現象が超越論的主体によって構成され超越論的主体のために構成される対象へと還元される。そして、超越論的主体およびその意識生活が現象の条件や限界や起源であるとされることになる。このとき、主体性によって構成されるのではない事物そのものという可能性は閉ざされてしまうことになり、主体性によって構成されることなく成り立つ事物そのものの可能性も当然ながら根本的に排除される。そのためマリオンは、フッサール現象学は構成作用をもつ主体性の概念を維持しているために、形而上学から徹底的に抜け出すことはできていないとする。「われわれは常に現象学は形而上学から抜け出していると考えている。しかし、そのように断言することはできない。というのも、フッサールはカントの立場（現象の可能性の条件・地平・自我の構成機能など）を維持しているからである。」マリオンによれば、フッサール現象学だけではなく、ハイデガー現象学も同様に形而上学の旧習を脱していない。なぜなら、「ハイデガーは存在の問題の特殊な地位を維持し、現存在の主体性をも維持している」[18] からである。したがって、マリオンからすればフッサールとハイデガーの哲学においては、

主体やそれに相当するもの（現存在）の構成作用が維持され、その構成者、初めの者、与える者としての役割が与えられている。

しかし、フッサールとハイデガーの自我や現存在に対するこのような理解—自我や現存在を構成者、与える者とする理解—は本当に自我の「本来の姿」を捉えたものだろうか。必ずしもそうではないとマリオンはいう。というのも、自我についてのこのような理解は、現象は主観に顕現するという仕方でのみ顕現し、主体（現存在であるとしても）によって顕現の条件と限界が示されるというある種の先入観の結果であるからである。しかし、上述のようにこのような先入観における現象の顕現と現象が自らを与えることや自らを贈与することは同じことであるという考えは、誤解によって盲目的に前提とされているに過ぎない。マリオンのいうように、現象の顕現と現象が自らを与えることは同じことではなく、両者の間には還元不可能な距離あるいは差異がある。事物が顕現あるいは現象化しようとするならば、必ず先に自らを与えなければならない。しかし、自らを与えるものは必ずしも顕現する必要はない。そして、還元を顕現への還元から自らを与えるものへの還元へと進めるならば、現象はまず自らを与えるものとして理解され、主権的な主体やデカルト的な形而上学的主体によって確立される限界の内におけるものではなくなる。そうすると、自我は必然的に更なる還元を受けなければならない。「私」は対象の構成者や与える者ではなく、与えられたものを受け取る者である。[19)]

これこそが自我の本来の姿である。現象学的な仕方で体系的にこの点を明らかにしたのがマリオンである。彼は現象学三部作の第一作『還元と贈与』においてすでに、超越論的自我や経験的な私と自らを与えるものによって要求され呼びかけられる対格の私とを区別し、「私」はまず自らを与えるものによって呼びかけられ要求されることによって生み出されるものであり、呼びかけられる目的格の私（〈私を〉）は創造し与える者としての主語の私（〈私は〉）ではないと強調している。「呼び求めは〈私を（moi）〉呼ぶ。私がまだ

〈私は（je）〉と言えないうちに、すでに呼び求めが私を呼びとらえ、私を把捉し包含してしまっている。なぜなら、呼び求めが私を一人の〈私を（me）〉として名指し命令しているからである。」ここでマリオンはレヴィナスと同様に、「まず呼び求めが先行し、……〈私を（me）〉の中で私が創られる」[20]といっている。そして、現象学における超越論的自我や経験的な私と呼び求めや呼び声によって呼びかけられる〈私を〉の差異を分析した後に[21]、マリオンは次のように結論する。「呼び声によって対格で呼びかけられ、主格を剥奪された〈私を〉は、一切の〈私は〉の不在を現象的に露呈させる。この呼び求めの絶対的な支配の下で、呼び求めが出現させる〈私を〉はあらゆる超越論的〈私は〉、あるいは構成する〈私は〉の失墜を証示するのである。」[22]どこから失墜するのか。デカルトからフッサールやハイデガー（現存在という名称ではあるが）まで一貫して付与されてきた端緒・起源・与える者としての地位から失墜するのである。自我はもはやこのような超越論的自我や構成する自我でも、構成者や与える者でもなく、そのためその意味での端緒や起源でもない。自我はまず〈私を〉であり、呼びかけられその呼び声の中で初めて造られるものである。この意味において、「私」はまず受け取る者あるいは目撃者であり、それ自身から出発してそれ自身を我に与える者を受け取り目撃する。この点について、マリオンは『与えられることで』においてより詳細な分析をしている。

マリオンは、そこで現象は自らを与える限りでのみ自らを表現するといっている。しかし、マリオンは次のようにもいう。現象は「自らを与えるように自らを表現するためには、現象はそれによって展開することができる「自身（soi）」がまず必ず何らかの形で自らを証明（s'atteste）しなければならない。そして、現象がその点へと至ろうとするならば、現象的な重点を占めなければならず、また出来事の起源を引き受けなければならない」すなわち、「現象」が自らを顕現するためには、必ず先に自らを与えなければならず、「自身」を与えるためには、必ず先に「自らを証明」しなければならない。そ

して、「自身」が「証明」されるためには、現象は必ず出来事の起源を引き受け、現象的な重心を占めなければならない。このことは、現象は必ずそれ自身によって自らを与え、それ自身を私に与えなければならないのであって、主体としての「私」によってその与えが起こり構成されるのではない。そして、「このようにしてのみ、現象は客体として疎外された地位から抜け出すことができる。」そのため、現象はもはや構成され顕現させられる客体ではなく、自らを与える主体となった。そして、そこでは、現象の「自身」も必ず自我の超越論の要求、すなわち自我を現象を客体化しその限界と条件を付与するものであるとする要求に抵抗する。「現象は自らを「自身」であると認めるときにのみ、自らを与え自らを顕示することができる。そしてこの「自身」もまた、自我のどのような……超越論的要求に対しても反対することを通してのみ、自らを証明することができる。」そのため、最終的には、「現象そのものの「自身」はその現象性における創始性を回復する。」このことは、私に対して次のような影響を与える。「自我の形態変化(anamorphose)の導きに基づいて、自我は新たに現象の単純な目撃と同じようなものとして定義される。」[23] したがって、「私」はその構成するものとしての超越論的自我の王位から退き、受け取る者や目撃者としての「私」になる。[24]

「私」というあり方は哲学史から見れば、「主体の形而上学的な在り方を引き継いで成立した」ものであるが、その思想的な事実そのものからみれば、「現象に由来する」ものであり、現象の呼びかけや呼び求めに由来し、現象にしたがって成立したものであり、現象の前に到来したり現象を生み出したりするようなものではない—後者は、まさにデカルト、カント、フッサールが付与した「私」の「主体の形而上学的なあり方」である。マリオンによれば、「受け取る者」や「目撃者」といったあり方こそが、自我の根源的なあり方であり本来の姿である。

哲学や現象学的な反省における「私」は、まず現象を与えられるのであり、現象を構成したり生み出したりするのではなく、まず世界を与えられるので

あり、世界を構成したり生み出したりするのではない。そのため、マリオンは「現象が与えられるという事実の厳密な結果として、受け取る者は「主体」とは反対の者として確立され、「主体」に取って代わる。」[25] という。このようにして「主体」に取って代わる「受け取る者」は、もはや現象の「作者」や「生産者」ではなく、我が身に発生する私に与えられる現象の「記録者、受け取る者、受動的な者」である。このことからマリオンは次のようにいう。「超越論的な形而上学と主観の形態はここにおいて初めて決定的に転覆される。」というのも、そこではある種の「価値の再評価」、自我についての価値の再評価が起こるからである。（p.31）そのため、まさにシェーン・マッキンレーがいうように「マリオンは少しも妥協することなく現象の与えられる者としての性質から出発することを堅持したのであり、主体の地平や限界から出発したのではない。……この堅持は主体の役割を純粋に受動的な受け取ることへと還元する。」[26]

三、受け取る者から与えられる者へ―自我の先鋭化

しかし、自我が純粋に受動的な受け取る者に還元された後には、それは還元における「形態変化」によって原初の姿まで立ち戻ったのだろうか。その根源的な意味は「受け取る者」という在り方において汲みつくされたのだろうか。否、そうではない。というのも、マリオンによれば、「受け取る者が与えられたものとしての現象が浮かび上がってくる中で誕生するものであるとすれば、そのような与えられたもの―それは事件としての純粋な衝撃を伴う―において誕生するのである。そうであるならば、この与えられた現象が飽和した現象（le phénomène saturé）として浮かび上がってくるとき、……衝撃は呼び声として尖鋭化され、受け取る者（l'attributaire）は、与えられる者（l'*adonné*）へと先鋭化される。」[27] ここで、マリオンはその被贈与性の現象学をさらに尖鋭化させている。彼は与えられたものを飽和した現象におい

て与えられたものに伴う衝撃を「呼び声」へと先鋭化し、それに応じて、与えられたものを受け取る「受け取る者」はこの呼び声によって召喚されるとき、「与えられる者」へと先鋭化される。そのため、マリオンの被贈与性の現象学においては、自我の最終形態は受け取る者ではなく、与えられる者である。では、自我はどのように受け取る者から与えられる者へと先鋭化されるのだろうか。受け取る者と与えられる者にはどのような違いがあるのだろうか。このことを明らかにするためには、飽和した現象において与えられたものがどのようにして呼び声へと先鋭化されるか、また呼び声はどのような現象学的特徴を持っているかということから論じなければならない。というのも、与えられたものの私に対する呼びかけによって、「私」はさらに形態変化して受け取る者になるからである。

『還元と贈与』においては、「飽和した現象」という問題はまだ暗示されているだけに過ぎなかったが[28]、後にマリオン自身によって飽和した現象として描かれることになる「呼び声」はすでに本書の重要な概念であった。マリオンはその第三の還元を「呼び声の、かつ、呼び声への還元」と命名している。そこにおいて、マリオンはすでに「呼び声」を「自らを与える」現象であるとしており、その基本的特徴―例えば「不意打ち（surprise)」―も後にその現象学の主題となる「飽和した現象」を予想させるものである。マリオンは『還元と贈与』において次のように呼び声の「不意打ち」的な性格を描いている。「不意打ちが言い渡される者を襲うのはまったく見知らぬ場所と出来事とから出発してであり、それゆえ不意打ちは何が自分を不意打つのかを構成、再構成、あるいは決定しようとする主観のあらゆえる意向を廃棄する。不意打ちが言い渡された者を捉えるのは、彼をいかなる基体性とも絶縁させるという点においてである。不意打ちは言い渡された者に存するいかなる自己構成的な極性をも非難し、最終的には彼を一つの出来事において、かつそれに基づいて包含する。……読んで字が示す通り、不意打ちは言い渡された者に彼が受けた呼び出しが何であるかを理解させないのである。」[29] こ

のような「不意打ち」についての説明からは、いわゆる「不意打ち」は自らを与えるものが言い渡された者の志向的な把握能力を超えており、言い渡された者のどのような意味付与あるいは概念からも溢れ出るものであり、理解できないあるいは理解を禁止されたものである。そして、これらは実のところマリオンが後に『与えられることで』において描いた「飽和した現象」の基本的な特徴と一致している。すなわち、「直観の現象における過剰……直観の飽和した現象における転覆とそれに先行するその溢出……のあらゆる意味」。[30] 後に『溢出について』の中でマリオンは飽和した現象のこのような「溢出」という特徴について類似した説明を与えている。「ここで、重要なのは溢出（surcroît）であり、直観が向かい合う概念の余剰（l'excès）であり、……直観が向かい合う概念および……概念のあらゆる意味をもってしても還元不可能な溢出である。」（p.vii）要するに、「飽和した現象」とは次のような現象である。それらはそれ自身から我に向かって与えられ、我のそれについてのどのような可能な概念や意味からも溢れ出る。

飽和した現象は、実のところマリオンが『還元と贈与』において主題としてすでに論じていた自らを与えるものを先鋭化したものである。『与えられることで』においてマリオンはカントの範疇表に基づいて、量・質・関係・様態の四つの面から飽和した現象を四つに分類している。すなわち、出来事（l'événement）・偶像（l'idole）・肉（la chair）・イコン（l'icône）である。また、このほかにマリオンは「啓示（la Révélation）」を以上の四つの飽和した現象と特徴を同時に持つ最も卓越した飽和した現象として単独で取り上げている。しかし、飽和した現象の呼び声の特徴を分析する際にはあくまで前の四つが挙げられている。マリオンは、出来事は量における飽和した現象であり、偶像は質における飽和した現象であり、肉は関係における飽和した現象であり、イコンは様態における飽和した現象である。それらは「ともに志向性を逆転させ、それによって呼び声を可能にし、さらには不可避のものにする。」そのため、「呼び声は実のところすべての飽和した現象の特徴をも浮

き彫りにしている。」[31)]

では、呼び声はどのようにして飽和した現象の特徴を浮き彫りにすることができるのだろうか。呼び声が呼び声であるのは、それが私の志向性から溢出しているからであり、それが私の志向性を逆転させ私を召喚し掻き立てるからである。したがって、飽和した現象が自らによって自らを与え、主体の命令を聞き主体に従うのではなく、溢れ出る主体の志向性が主体の志向性を逆転するとき、それはこの意味において「主体」に向けて発される呼び声として表現され先鋭化される。マリオンは、このような呼び声は我の構成する者や与える者としての性格を剥奪するとともに、このような呼び声のみが「私」を召喚し掻き立てるという。私はこの呼び声を受け取るときのみ、姿を現しまた私自身を受け取る。この意味における「私」こそが、マリオンにおけるラディカルな「与えられる者（l'adonné)」である。そのため、マリオンは次のようにいう。「与えられる者は次のようにして誕生する。呼び声がそれを完全に受け取る者としてそれ自身を受け取る者に「主体」を継がせることによってである。」[32)]

しかし問題は、呼び声が一体どのようにして与えられる者としての「私」を掻き立て創り出すのかということである。マリオンは次のようにいう。「呼び声は自己顕示の四つの特徴に基づいて現象学的な方法で与えられる者を創り出す。四つの特徴とは、呼び出し(la convocation)・不意打ち(la surprise)・会話（l'interlocution）・事実性（la facticité）（個体化、individuation）である。」[33)] この四つの特徴を通して、呼び声は召喚を受ける者あるいは呼ばれる者を与えられる者として先鋭化する。

まず、呼び声の「呼び出し」という特徴とその「私」に対する影響および与えられる者の創建について見よう。私が呼び声によって召喚されるとき、私は呼び声に向かって向きを変え呼び声を聞く。ここでの私はもはや自ら創り出し自ら実現するようなものではなく、自足的なものでもない。私は主格から対格あるいは与格へと変わる。マリオンは、先に自己同一的な私があり、

その後にその私が召喚されるのではないとする。事情は反対である。まさに呼びかけられ、呼びかけを受け取る際に、「私」ははじめて同一性を獲得する。[34] この意味において、与えられる者は呼び声の召喚によって創り出されるのである。またこのため、その同一性は根本的に変化した同一性であり、召喚を受けて召喚の中ではじめて創り出される同一性であり、事前に存在し召喚されるのを待っているような同一性ではない。

次に呼び声の「不意打ち」としての特徴である。呼び声の不意打ちという特徴は、呼び声が突然呼ばれる者をつかみ、こわばって動けず、もはやどのような能動的な志向も持たず、どのような知識が現れることもなく、対象を構成することもできないようにすることを指している。[35] いいかえれば、呼び声の不意打ちは私の客体化する志向性を逆転させ、その作用を発揮できなくする。呼び声が私を不意打ちする際には、私は呼び声を構成するのではなく、呼び声によって私がつかまれ支配される。私は完全に受け取るだけであり、与えることはない。また、このような完全な不意打ちを受けることによって、支配される中で私自身を受け取り、同一性を獲得する。

呼び声の「会話」としての特徴に進もう。注視しておくべきは、「会話」としての呼び声は他者と私との平等な対話を指すのではなく、呼び声が私に呼びかけること、私に呼びかけ私を冒すことを指している。そのため「ここで問題となるのは、主格（客体を見つめる―フッサール）としてでも、属格（存在の―ハイデガー）としてでも、対格（他者に訴えられる―レヴィナス）としてでもなく、与格として理解された人間である。呼び声は呼び声自らを私に与える前に、私は呼び声から私を受け取り、呼び声は私を私自身に与える。」[36] いいかえれば、与えられる者はそれを召喚する呼び声において自らを受け取る。ここにはマリオンの「与えられる者」についての新たな視点が見て取れる。与えられる者としての私は、もはや主格（デカルト－カント－フッサールと続く一連の自我に対する超越論的な理解）でないだけではなく、属格（ハイデガーが自我を存在に帰属させるようなやり方）でもなく、

対格（レヴィナスが自我をまず他者によって訴えられる者であるとすること）でもなく、与格である。「私が呼び声において私を受け取り、呼び声が私を私自身に与える」という意味での与格である。[37] 文法における格のあり方が反映しているのは、深い次元での事実の在り方である。すなわち、私はもはや与える者や構成するものでも、主体でもなく、与えられる者、召喚を受けるもの、贈与を受ける者である。

最後に、「事実性」という特徴である。ここでの「事実性」は「個体性」を指している。というのも、呼び声という事実は私を個体化し、私をこの私として独立させるからである。「呼び声は私を私自身として私に与える。端的にいれば、私を個体化する……。」[38] そのため、先に「私」があり呼びかけられるのを待っている訳ではない。反対に、呼び声がまず呼びかけて初めて、私は呼び出され実際性を獲得し、個体化されこの「私」となる。

したがって、マリオンによれば、呼び声の不意打ち・会話・召喚およびそれらが「私」に押し付ける実際性の共同作用の下で、「私」はまず対格あるいは与格として浮かびあがり、与えられるものとして創り出される。

以上をまとめると、マリオンは以下のような段階を経て一歩一歩自我を与えられる者へと先鋭化するということになる。まず、現象はそれ自身から―主体性（あるいは現存在などのそれに相当するもの）が与えるという仕方からではなく―出発して自らを与え、この自らを与える現象を第一のものであることを確認する。このことが最も重要な一歩である。続いて、次のことが主張される。現象はそれ自身によって与えるものであり、その自らを与えることは「どのような自我の超越論的機能に対する要求をも拒絶し、あるいは―同じことであるが―可能的な超越論的自我を現象経験の最終的な基礎とする要求を拒絶する。」いいかえれば、「自我はその超越論的王位を剥奪される。」（p.56）そして、最後にこれらのことから、「私」は超越論的自我―構成するもの・与えるものとしての主体―から与えられるものに還元され、二重の意味での与えられる者になる。すなわち、自らを与えるものを受け取る

という意味においてと、受け取ることにおいて私自身を受け取るという意味においてとである。そのため、「呼び声の、かつ、呼び声への還元」は、超越論的自我を必然的に与えられる者へと還元する。

では、超越論的自我が与えられる者へと還元され、その構造し与える者としての作用が剥奪されるとき、それは純粋な受け取る者となり、受動的に受け取るという作用しか持たなくなるのだろうか。これは一部の研究者がマリオンに対して抱く疑問である。例えば、シェーン・マッキンレーは、マリオンは受け取る者が受け取る際の解釈作用や能動的な作用を無視しているとする。[39] しかし、実際にはマリオンはそれを無視している訳ではない。マリオンが私を「受け取る者」に留まらず、「与えられる者」へと還元するとき、マリオンはこの新たな術後を用いて私の超越論的自我や経験的な自我以外の新たな役割と機能を表現している。（p.59）そのため、「与えられる者は受け取ることによってその特徴を獲得し」、「受け取ることは当然受動的に受け取ることを暗示している」としても、「〔受け取る事は〕また能動的な姿勢を要求する。というのも、与えるものに相応しい程度に達し、到来したものを保持するためには、必ず〔能動的〕能力（*capacitas*）が働かなくてはならない―与えられたものに働きを加え、それを受け取らなければならない。（p.60）マリオンが苦心しながら与えられる者という「第三の述語」を用いて新たな「私」のことを呼ぶのは、この与えられる者としての私が能動性と受動性の区別を超えているからであり、二重性を兼ね備えているからである。それは受け取るだけではなく、受け取ると同時に加工し働きを加える。このような働きも二重のものである。「与えられたものに働きを加え、それを受け取るだけではなく、自己自身にも働きを加え受け取っていく。与えられた者は毎回与えられる者の働きを要求する。自らを与えるためにこのような要求をするのである。」（p. 60）

贈与が止まることはなく、働きも休むことはない。贈与が多いほど、働きも多くなる。与えられた者が保持され、さらに顕現するためには、与えられ

たものに対する不断の働きが必要であり、このような止まることのない働きが、与えられた者の現象学的な機能なのである。

結

以上に見て来たように、デカルト以来、西洋哲学は自我を端緒や根源とする主体の哲学の時代に突入した。この哲学はフッサールの超越論的間主観性の現象学によってその頂点に達した。この主体の哲学の伝統においては、自我はまず哲学的省察の出発点あるいは端緒として理解され、さらには一切の対象の可能性の条件と限界であり、一切の事物の構造の起源、一切の対象を与える者として理解された。デカルト哲学研究の専門家であり近年の現象学を代表する人物であるマリオンは、デカルト－フッサールと続く主体の哲学の伝統に対して最も徹底したラディカルな解釈を行い脱構築した。もはや、自我は主体・端緒・起源としては理解されず、与えられた者を迎え入れたり抵抗したりする与えられる者である。そして、このようなラディカルな理解が可能であるのは、その現象学的還元に対するラディカルな理解によってである。この還元はフッサールのような構造性の起源としての超越論的主体へと向かう還元でもなければ、ハイデガーのような現存在の存在へと向かう実存論的還元でもなく、与えられたものへの還元であり、最終的には贈与性そのものへの還元である。この還元を通して、現象そのものはもはや構造性の起源としての超越論的主体や実存する現存在によって与えられるものではなくなり、現象そのものによって現象そのものから出発して与えられるものになる。そのため、自我は超越論的な構成者としての自我ではなく、実存論的な現存在でもなく、「与えられる者」へと還元される。そして与えられる者には二重の意味がある。すなわち、与えられたものを受け取るという意味と、受け取ることにおいて自身を受け取るという意味である。そして、この与えられる者の現象学的機能は、それ自身によって与えられたものに伴う衝

撃に抵抗したり妨げたりすることによって、与えられたものを顕現させ、現象性を獲得させ、現象化することにある。そして、その過程においてこそ、与えられる者自身も見えないものを見えるようにすることによって顕現する。したがって、与えられたものに伴う衝撃や与えられる者のこの衝撃に対する抵抗および与えられたものと与えられる者の顕現は次のような比例関係にある。衝撃が大きいほど、抵抗も強く、抵抗が強いほど、顕現も多い。

明らかに、マリオンの自我に対するこのようなラディカルな理解（与えられる者として）は伝統的な自我に対する理解の二つのモデル、すなわち自我を根源的な超越論的主体として捉えることおよび純粋に受動的な受け取る者と捉えることとその困難から抜け出している。マリオンは自我を与えられる者として理解し、起源を創造する者と純粋に受け取るだけの受動的な自我の間に自我を定位し、自我についての二つの伝統的な理解の間の緊張関係を緩和しようと試みた。以上のように、マリオンの自我に対するこのような理解は巧妙で精緻なものであり、自我の事実そのものに接近しているといってよいだろう。

ただし、マリオンのこのような理解にはさらに進んで議論すべき問題が二つある。

まず、マリオンには自我が与えられる前、あるいは呼び声を聞く前の状態についての分析が欠けており、自我がなぜ「与えられうる」のか、「与えられうる」ためにどのような条件が必要かといった点についての分析が欠けている。この欠点が問題となるのは、次のような状況は理解しがたいからである。すなわち、与えられたものが呼び声として異なった自我へ向かうとき、ある人は聞くことができ与えられ応答することができるが、ある人はそもそも聞くことができず呼び声に対して麻痺した状態であり、さらにはある人は聞こえてはいるものの全く異なった呼び声として理解し、そのため全く異なった応答をするといった状況である。このような異なった顕現の仕方は、「自我」の「与えられうる」ための条件についての超越論的分析を行って初

めて明らかになる。しかし、このような考察はマリオンにおいては欠如しており、マリオンの与えられる者に対する分析は形式的なものに過ぎないという側面があると言わざるをえない。

次に、マリオンは与えられる者の現象学的な機能について与えられる者の作用を過大に評価し、外在性そのものを抹消する危険を冒している。このことは特にマリオンが呼び声がどこから発せられたものであるかをどのようにして判断するのかという問題に答えようとする際に顕著になる。私が聞いた呼び声はどこから来たのか。何者によって発せられたのか。私が聞いたのは結局のところ、存在の呼び声（ハイデガーのような）だろうか、他者の呼び声（レヴィナスのような）だろうか、神の呼び声（ユダヤ教徒やキリスト教徒のような）だろうか、あるいは道や良知の呼び声だろうか。マリオンのこの問題に対する回答は、それは私の応答や私の決定や私の解釈によるというものである。「ここには解釈の構造が存在している。……われわれがハイデガーを読めば、それを存在の呼び声だとするかもしれない。われわれがレヴィナスを読めば、それを他者の呼び声だとするかもしれない。……要するに、私の応答がそれを決定する。応答において、私は呼び声の起源を決定する。」[40] このようなマリオンの回答は明らかに私の作用を過度に評価している。というのも、もし呼び声の起源が私の解釈や私の決定によって決まるのだとすれば、それは必然的に呼び声の起源の持つ絶対的な外在性は改めて還元ざれ抹消されることになるからである。これは超越論的主体性の哲学の古い道に戻ることではないだろうか。また、これはマリオンが自我を与えられる者として先鋭化する際に予想しなかった結末であるようにも思われる。マリオンはこのような困難から抜け出すことができるだろうか。このことについては、他の機会に改めて論じることにしたい。

（河合一樹　訳）

※西洋語の引用については次の邦訳を参照し、中国語の文献情報の後に［］

の中に邦訳の頁数を示した。

マリオン『還元と贈与―フッサール・ハイデガー現象学論攷』芦田宏直ほか訳、行路社、1994 年。

ハイデガー『存在と時間』原佑ほか訳、中央公論新社、2003 年。

※邦訳が存在しないマリオンの著作については、訳者が論文中の中国語から日本語に訳した。

※原注の中のフランス語から中国語へ訳す際の表現に関するものは削った。ただし、本論文全体に関わるものとして、次のことを説明しておきたい。本論文では l'adonné と l'attributaire にそれぞれ「給予者」と「接受者」という中国語を用いており、「受予者」の「受予」には「給予（与える）」を受けとるという意味に加えて、「予（私）」を受けとるという意味も込められているとのことである。翻訳に当たって日本語でこのニュアンスを再現することは出来なかったが、「給予者」を「与えられる者」、「接受者」を「受け取る者」と訳語を変えた。

注

1）Jean-Luc Marion, *De surcroît, études sur les phénomènes saturés*, Paris: PUF, 2010, p. 56. 以下、本書からの引用については引用の後に書名を略しページ数のみを示す。

2）馬里翁『還原与給予』方向紅訳、上海：上海訳文出版社、2009 年、338 頁［『還元と贈与』p.277］

3）倪梁康『胡塞爾現象学概念通釈』（増補版）、北京：商務印書館、2016 年、434 頁。

4）倪梁康『胡塞爾現象学概念通釈』（増補版）、434 頁。

5）馬里翁『還原与給予』348 頁。［『還元と贈与』288-289 頁。

6）馬里翁『還原与給予』348-349 頁。［『還元と贈与』289 頁］

7）馬里翁『還原与給予』107-108 頁、108 頁、349 頁、349 頁。［『還元と贈与』87-88、289 頁］

8）ハイデガーは『存在と時間』において「現象」というギリシャ語の語源に遡ることによって、「現象」を次のように定義している。「「現象」という表現の意義として堅持されなければ」ならないのは、おのれをおのれ自身に即して示すもの、つまり、あらわなものということである。」海德格爾：《存在与時間》（中文修訂第二版）、陳嘉映、王慶節訳、熊偉校、陳嘉映修訂、北京：商務印書館、2015 年、第 37 頁。［『存在と時間』

73 頁。

9) Jean-Luc Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, Paris: PUF, 2013, p. 8.

10) 説明しておかなければならないのは、マリオンは現象学三部作の第一部すなわち1989年の『還元と贈与』においてすでに第三の還元を明確に提示していたが、そこにおいてはこの還元は「呼び声の、かつ、呼び声への還元」と呼ばれていたということである。マリオンはこのときハイデガーの「存在の呼び声」・キリスト教徒の聞く「神の呼び声」・レヴィナスの「他者の呼び声」についての現象学的な分析からこのような還元を引き出した。いわゆる「呼び声の還元」とはこの三種類の呼び声の起源(存在・神・他者)をエポケーすることであり、「呼び声への還元」とは呼び声の純粋な構造そのものへと還元することである(馬里翁『還原与給予』336-339 頁参照)。ただし、マリオンはそこですでに「呼び声」を「自ら与えるもの」という意味で理解しているため(馬里翁『還原与給予』338 頁参照)、『還元と贈与』において第三の還元を指すものとして用いられている「呼び声への還元」は、後にマリオンがより明確に提示する「与えられたものへの還元」「贈与性への還元」の先駆けであるといってよいだろう。

11) Hans-Dieter Gondek László Tengelyi, *Neue Phänomenologie in Frankreich*, Berlin: Shurkamp Verlag ,2011, S. 217.

12) Marion, *De surcroît, études sur les phénomènes saturés*, pp. 16-32, および朱剛「作為第一哲学的被給予性現象学——馬里翁対経典現象学的激進化》」『哲学動態』2019 年第 6 期参照。

13) Shane Mackinlay, *Interpreting Excess, Jean-Luc Marion, Saturated Phenomena, and Hermeneutics*, New York: Fordham University Press, 2010, p. 3.

14) Shane Mackinlay, *Interpreting Excess, Jean-Luc Marion, Saturated Phenomena, and Hermeneutics*, p. 3.

15) Jean-Luc Marion, *Sur le prisme métaphysique de Descartes*, Paris: PUF, 2004, p. 102.

16) Shane Mackinlay, *Interpreting Excess, Jean-Luc Marion, Saturated Phenomena, and Hermeneutics*, p. 3.

17) 朱剛「胡塞爾交互主体性現象学中的双重開端与双重還原」『哲学研究』2018 年第 9 期参照。

18) Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, p. 6.

19) 欧陽謙「「充溢現象」与主体換位——論馬里翁的「新現象学」」『哲学動態』2017 年第 10 期参照。

20) 馬里翁『還原与給予』339-340 頁。[『還元と贈与』p.278]

21) 馬里翁『還原与給予』340-341 頁参照。

22) 馬里翁『還原与給予』341 頁。[『還元と贈与』p.280]

23) Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, p. 405.

24）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, p. 406.
25）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, p. 411.
26）Shane Mackinlay, *Interpreting Excess, Jean-Luc Marion, Saturated Phenomena, and Hermeneutics*, p. 2.
27）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, pp. 432-433.
28）マリオンは後の『余剰について』の「読者へ」においてもこの点を認めている。「この問題〔飽和した現象の問題〕は、被贈与性（la donation）の現象学における重要性から出発して徹底的に現象学全体を新しい仕方で把握するという我々の試みが始まって以来―最初は暗示的なものに過ぎなかったが―不可避な形でその輪郭を顕してきた。」（p.viii）
29）馬里翁『還原与給予』343-344 頁。［『還元と贈与』p.283］Cf. Marion, *Réduction et donation, Recherches sur Husserl, Heidegger et la phénoménologie*, Paris: PUF, 2015, pp. 347-348.
30）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, p. 435.
31）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, p. 436, p. 435.
32）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, p. 436. この意味において、l'adonné は「受け取る者（l'attributaire）」と同じではない。というのも後者はただ自らを与えるものを受け取るだけであるが、前者は自らを与えるものを受け取るだけではなく、「受け取ることにおいて自らを受け取る」ものである。
33）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, p. 436. 注目しておくべきは、マリオンは『還元と贈与』においてすでに呼び声の「呼び求め（la revendication）」の四つの特徴、「呼び出し（convocation）、不意打ち（surprise）、自己同定（identification）、事実性（facticité）」を提示しており、呼び声がこの四つの特徴が「呼び声の純粋形式以外のいかなる前提もなしに言い渡された者をそのものとして指定する。（馬里翁『還原与給予』345 頁、Cf. Marion, *Réduction et donation*, p. 349［『還元と贈与』284 頁）」と述べていることである。先程引用した『与えられることで』の思想と『還元と贈与』の思想は明らかに連続している。ただし、表現には多少の変化がある。まず、『還元と贈与』においては四つの特徴に入っていた「自己同定」は『与えられることで』においては「会話」になっている。次に『還元と贈与』において呼び声が四つの特徴を通して創り出すのは「言い渡された者（l'interloqué）」であったが、『与えられることで』においては「言い渡された者」は「与えられる者（l'adonné）に変わっている。この二つの変化は、明らかにマリオンの思想が後期になってより明確になり成熟し、より正確な表現を見出したということを反映している。
34）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, pp. 436-437, p. 437.
35）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, pp. 437-438.
36）Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, pp. 438-439, p. 439.

37) 先に見た文章では、マリオンは呼び声の「呼び出し」という特徴を論じる際に、私を「対格」と「与格」という意味での「補語格」として理解しており、ここではマリオンは「対格」という身分をも「私」から排除し、「与格」のみと見なしている。

38) Marion, *Étant donné, Essai d'une phénoménologie de la donation*, p. 439, p. 440, p. 411.

39) Shane Mackinlay, *Interpreting Excess, Jean-Luc Marion, Saturated Phenomena, and Hermeneutics*, p. 2.

40) 馬里翁『笛卡爾与現象学：馬里翁訪華演講集』方向紅・黄作主編、北京：生活・読書・新知三聯書店、2020 年、265-266 頁。